

二〇一五年度 卒業論文

親鸞・蓮如の伝道と現代の都市開教

コピー禁廠

L120073

龍山崇道

目次

序論	1
本論	2
第一章 浄土真宗の伝道の構造	2
第二章 開教の礎	4
第一節 親鸞の東国布教と二十四輩	4
第二節 蓮如の吉崎布教	10
第三章 現代の都市寺院の伝道	15
第一節 都市開教・伝道の意義	15
第二節 開教の現状	18
第三節 新たな伝道方法	20
結論	23

註

参考文献

参考論文

Copyright © 2010 禁本 廠

序論

平成二六年六月六日、本願寺二十四代即如門主から二十五代専如門主へ法統の継承が行われた。専如門主が本願寺門主に就任された際の「法統継承に際しての消息」には次のようにある。¹

宗門の現況を考えます時、各寺院にご縁のある方々への伝道はもちろんのこと、寺院にご縁のない方々に対して、いかにはたらきかけていくのかを考えることも重要です。本願念仏のご法義は、時代や社会が変化しても変わることはありませんが、ご法義の伝え方は、その変化につれて変わっていかねばならないでしょう。

現代という時代において、どのようにしてご法義を伝えていくのか、宗門の英知を結集する必要があります。

今日、様々な問題が起こる中、現代の人々に伝道してゆくことが困難な時代である。しかしながら、門主自身が「現代社会に対応した伝道」を掲げ、その上で「新しいご縁づくり」の一つである都市開教という取り組みに重点を置いていることは浄土真宗の法義を広めてゆくにあたり意義深いものになると言える。

本論文では第一章に「浄土真宗の伝道の構造」について述べ、第二章では「開教の礎」と題し、越後を後にした親鸞の関東における伝道、蓮如の吉崎における布教について考察する。

第三章では「親鸞・蓮如の時代の伝道」と「現代の都市寺院の伝道」について類似点、相違点などを比較し「都市開教」における寺院の役割、また抱えている問題を考察し、課題の提起と解決策を論じていきたい。

第一章 浄土真宗の伝道の構造

親鸞・蓮如の伝道を考察する前に、まず浄土真宗における伝道を考察する必要がある。

伝道という言葉は他にも布教・教化とも言い表せられる。布教とは、²

教えを説き弘めること。口演によって法義を述べる伝道活動を指す場合が多い。

布教と伝道は厳密な意味合いは多少異なるものの、布教伝道という言葉で表すことも多く、教えを伝えるという大まかな意味としては同じ意味と考えてよいだろう。浄土真宗の教義とは、³

真実の教である『仏説無量寿経』に説き示された南無阿弥陀仏の名号を疑いなく聞く信心によって、現生には正定聚に住し、当来には阿弥陀如来のさとりそのものの世界である浄土に往生して滅度の仏果を証する。

信心は、阿弥陀如来の大智大悲の徳を具えた名号をいただくことであるから、往生の正因となる。信心決定の上は、報恩感謝の思いから、仏徳を讃嘆する称名を相続する。これを信心正因、称名報恩というのである。

この教義、つまり阿弥陀仏の本願・救いを、門信徒に説き伝えていかなければならない。浄土真宗で説かれる救いとは南無阿弥陀仏の名を称え浄土に生まれるご縁に遇う、という誰が聞いても理解し易い教えである。しかしながら論理的に理解し難いのは救いの内容部分なのである。その難しい救いの内容を門徒に尋ねられた時、伝道者は分かり易い言葉に置き換えて法義を要約・説明することが求められている。特に伝道に携わる僧侶にはその責任が重く押し掛かってくることは勿論のこと、言葉一つ取っても間違いの無いように厳選し且つ納得しても

らうという一連の流れを組むことも要求され続けるのである。

伝道に携わる者は自信教人信の精神を念頭に置きながら、伝道に臨む必要がある。自信教人信とは、

阿弥陀仏の本願の救いを自分も信じ、他人にも信を勧めること。『礼賛』に「みづから信じ人を教へて信ぜしむること、難きなかにうたたさらに難し。大悲をもつて伝へてあまねく化するは、まことに仏恩を報ずるに

なる(自信教人信 難中難更難 大悲伝普化 真成報仏恩)」（七註六七六）とあるのによる。⁴

この自信教人信とは善導大師以来の念仏者一人一人が心得る姿勢として表されていると共に浄土真宗の伝道において根本的な核の部分と表して良いだろう。しかし自信教人信という意味を理解していても、自身が完全に信じ切れていない教えを他者にだけ信じさせるといふことは難しいだろう。重ねて、本当の意味でその教えを味わい切れていない者に浄土真宗の魅力を伝えられるのだろうか。岡亮二氏は『教行信証』の中で親鸞が善導の『往生礼賛』を引用した際、「大悲伝普化」という言葉の「伝」の字を「弘」に置き換えて解釈していることに着目している。⁵「大悲を伝えて普く化する」という原文の意味は「大悲弘く普く化する」という意味に変わり、人々を教化するのは選ばれた人ではなく大悲そのものとなる。ここで親鸞が重要視した点は、自身が仏法を他の人に伝える役回りがあると自覚し、またそれを努力するのではなく、自分が仏の教えをそのまま信じていくことそのまの形が報恩であるということである。念仏し阿弥陀如来の名を称して喜ぶ道こそ報恩であり、念仏を喜ぶ衆生は阿弥陀仏の光に照らされながら包まれている。そうした喜びの中で他の人に念仏の喜びが自然と伝わる理由は、他でもない阿弥陀仏の大悲のはたらきが「弘く普く化する」からなのである。

伝道とは教えを伝えて道を指し示すことという意味合いだが、あくまでも伝道に携わる者は阿弥陀如来が衆生を教化するにあたっての取り次ぎに過ぎないのである。つまり、伝道を行う自分自身が門信徒を導く立場であるかのように錯覚してはならないということも前提として噛み締めておきたいことである。暗く迷い果てた海を難破している小船に光を照らし、航路を正す灯台を阿弥陀如来に例えるなら、伝道者は灯台守に例えられる。宗祖親鸞の灯した念仏の灯は世代を越えて中祖蓮如へ渡され、また次の世代へと受け継がれ、今日へ至る。法統が絶えることなく今もあり続ける背景には祖師方、先人たちの多大な努力や工夫が施された証に他ならない。

西本願寺の両堂の蠟燭、並びに輪灯の明かりは常灯明より分灯され消えることなく今日まで灯され続けている。火を絶やさず常に油を注ぎ、明かりを灯し続けることは実に手間もかかり気を張ることなく今日まで灯され続けている。法の護持を任され、現代までその火を残した先人の並々ならぬ思いに重ねて、法の灯は絶えることなく続きこれからも絶えることのない光であることを意味していると言える。現代の伝道者が、その法統の灯台守として、また伝道の担い手として何を護持し、研鑽を重ねて、何を学んでいくべきなのかも本稿で取り上げるべき要である。

第二章 開教の礎

第一節 親鸞の関東布教と二十四輩

親鸞は承安三年（一一七三）に京都の日野に日野有範の子として誕生する。後に九歳で出家し、天台宗青蓮院に

て得度し以降二十年間、比叡山・横川にて常行三昧、不断念仏の行に明け暮れる。自力修行では自身の煩惱を断ち切ることは出来ないと悟り下山後、法然の居る吉水の草庵を訪ねて専修念仏の教えに遇い門に入る。その後朝廷より念仏禁止令が出され、越後国府(現在の新潟県)に流罪となるのは親鸞が三十五歳の時である。その後流罪を赦された親鸞は妻子を連れて関東に赴くことになる。親鸞が関東回りで京都に戻った理由は明らかにされていないが、当時の東国はまだ天台宗の規制が緩かったということも理由としてあげられる。(他にも諸説あり)親鸞は晩年も京都にて伝道活動を続ける。文書布教として門弟との手紙のやりとりや、息子・善鸞の邪義を確かめに関東の門弟達が親鸞を訪ねた際も面会し、彼らの問いに答えた。7この一節で論じていく要は、親鸞の関東における伝道と門弟たちについてである。親鸞の主著である『顕浄土真実教行証文類(教行信証)』の執筆を始めたのも、この関東在住の時であると言われている。関東に在住したのは四十二歳から六十二歳までの約二十年間とされている。特に茨城県笠間市の稲田を中心に伝道活動を展開していくことになる。越後に流罪に遭った親鸞は、その後京都に戻らず関東に赴いた。前述したように関東移住の理由は諸説あるが、関東において伝道をした結果、優秀な弟子たちを育て上げることになる。その代表が後の関東二十四輩である。二十四(余)輩とは、親鸞の直弟の中でも後世に特に高弟と呼ばれるようになった人、及びその開基寺院を意味する。8

元弘二年(一三三二年)に覚如が如信の三十三回忌を営んだ時、親鸞の門弟の遺跡を継ぐ二十四人が集まり、邪義をただすべきことを誓って連署したことに始まるといわれる。二十四輩の寺院の多くは中世に廃退したが、近世に復興され、二十四輩巡拝が盛んになった。9

二十四輩の選出については親鸞の孫である如信が選定した説や、本願寺三代宗主の覚如が選定したという説など諸説がある。親鸞の直弟は数多く存在するが、高弟と呼ばれる弟子たちはこの二十四輩とは別に後に「六老僧」と呼ばれる弟子たちである。光明寺本『親鸞聖人門侶交名牒(交名牒)』には、「明光・明空・了海・源海・了源・源誓」と六名の名前が挙げられる。この高弟らの登場は後の都市開教、初期の真宗教団の礎を作り上げたと言っても過言ではない。越後を後にした親鸞の「自信教人信(みづから信じ、人を教へて信ぜしむること)」¹⁰を深めるため民衆への実践的な伝道が始まるのである。親鸞の弟子たちについて記した『交名牒』において親鸞の主な門弟を国別に見ていくと次のように分布される。

常陸(茨城県)：入西、乗念(南庄)、順信(鹿島)、慶西(北群由下)、実念(笠間)、安養(奥群)、入信、念信、乗信、唯信、慈善、善明、唯円(河和田)、善念、頼重(笠間)、法善(北群)、明法(北群)、証信(南信)、教念(布川)、証善、下野(栃木県)：真仏(高田)、顕智(高田)、慶信(飯沼)、信願(那須)、尼法仏(上野)
下総(千葉県・茨城県)：性信(飯沼)、信楽(新堤)、常念(佐島)、西願、善性(露田)
武蔵(東京都・埼玉県・神奈川県)：西念(太田) 遠江(静岡県)：専信
陸奥(福島県・宮城県・岩手県)：如信(大網)、無為小(会津)、是信(和賀)、本願(藤田)、唯信(会津)、唯仏(会津)、覚円(浅香) 越後(新潟県)：覚善(国府) 京都：尊連、宗綱、尋有、兼有、蓮位、賢阿、善善(善覚)、浄信 不明：一名¹¹

この記録からも常陸(茨城県)に分布された門弟は名前が判別するだけでも二十名と大多数を占めており、親

鸞の熱心な伝道の表れであると言える。また、『交名牒』に加えて『末灯鈔』、『血脈文集』などに記載された門弟を合わせるとその数は百ちかいものになるという。親鸞に直に会い、その教えを受けた門弟たちはさらに門弟を有していたのである。後に成立する門徒集団はこの面授の門弟たちが念仏者をまとめ上げ、中心となって集まりを見せたのである。関東の門弟は各々、所在地から集団の名前が付けられたことが分かる。例えば、後述する横曾根門徒は信信が中心となった下総国横曾根の門徒集団である。また下野国高田の真仏と顕智を中心とした集団は高田門徒、常陸の鹿島であれば順信が中心となった鹿島門徒と名付けられた。他にも常陸・教念の布川門徒、武蔵・源海の荒木門徒、下総・常念の佐島門徒、陸奥・覚円の浅香門徒、性意の伊達門徒などがあつたと言われる。では、親鸞にゆかりのある二十四輩の開基寺院を考察していききたい。親鸞の曾孫である覚如の作成した『親鸞伝絵』（『御伝鈔』）に関東での伝道を書き記すもので「稲田興法の段」がある。内容としては親鸞が病気に苦しむ村人のために『浄土三部経』を千回読誦しようとするが他力を信じながら自力の執心に迷う自分がいること、助業が要らない専修念仏、弥陀の光に包まれている、ということに気づかされ「現生正定聚」の体験をするというものである。¹²他にも親鸞を殺めようとした山伏の弁円が逆に親鸞に帰依する「山伏済度」などが書かれている。この「浄土三部経千回読誦」を行ったのは上野国佐貫庄（現在の群馬県板倉）である。親鸞一向が越後から関東に到着して直ぐのことである。親鸞は法然の居た吉水の草庵を訪ね、専修念仏の教えに遇った時、自力の心を捨てたと言われるが、また十数年経った時に、この「浄土三部経千回読誦」を無意識のうちに口に出すことがあつたという。その時に、この佐貫での一件を思い出し自身の煩惱、執着の心のしつこさを思い知らされたことで

あろう。その後親鸞は小島の草庵にて三年ほど過ごした後に、草庵を蓮位に任せて常陸国、稲田の草庵(茨城県笠間市)へ移住する。後にこの草庵を西念寺として創設する。親鸞の主著『教行信証』の起草の地であり、親鸞が最も長く拠点として滞在した地でもある。後の二十四輩となる高弟たちは親鸞からの教化を求めてこの草庵を訪ねたという。次に考察するのは二十四輩・第十九、上宮寺である。開基の明法は元々播磨公弁円といい、山伏として修験道を極めていた。常陸の国で加持・祈祷をしていたが呪術や祈祷などを否定した親鸞の布教、親鸞を訪ねて多くの民衆が集うことを嫉み殺害を目論み、稲田草庵に押し掛けるも、逆に親鸞に帰依して弟子入りするといった逸話が伝わっている。¹³ 加えて、順信開基の寺、二十四輩・第三、無量寿寺(鳥栖)について見ていく。開基の順信は元々鹿島神宮の官司を務めていたが出家し順信と名乗り、後の「鹿島門徒」形成に尽力した人物である。無量寿寺には幽霊済度の逸話が残っている。親鸞が村人に小石を集めさせて『三部経』の経文を小石一つ一つに書き、女の墓に埋めたところ幽霊騒ぎが治まったという。恐らく、親鸞は初めに伝道のための環境作りを行ったのだろう。村人の「不安」を取り除かせたこの環境作りは、阿弥陀仏の教えが心に届くための親鸞の手立て・工夫だと言えるのではないだろうか。それが一種の方便のようなものだと、後に気づかされた弟子たちもいたことであろう。この鳥栖の無量寿寺には女人成仏御経の石塚が建てられている。親鸞は村人に、女人であることが往生の妨げにはならないということに加えて、阿弥陀如来の光明に遇った者はそのまま救われていくと説いたに違いない。救い摂り捨てることがない摂取不捨のはたらきによって往生し即成仏することが約束された我々凡夫は死後に娑婆世界をさ迷うこともないと、親鸞は説いたのかも知れない。このように親鸞に帰依した者たちは様々

な出自であることが分かる。しかし、親鸞は生い立ち、生まれ、身分に関係なく念仏者は皆阿弥陀如来の本願力の下皆分け隔てがないということ説くのである。「一切の有情はみなもつて、世々生々の父母・兄弟なり」¹⁴親鸞の熱心な伝道や法話と人間的魅力に惹きつけられた多くの弟子たちがこの関東の地で寺の護持や伝道布教を担っていくことになるのである。では、親鸞の布教において形成された有力な門徒団体を考察したい。

まず初めは横曾根門徒である。下総飯沼(現在の茨城県常総市)の門徒集団であり、中心人物は性信(一一九一―一二七五)である。第一番・報恩寺の開基であり、建長の念仏訴訟(『親鸞聖人御消息二十五通』)¹⁵、並びに善鸞事件の解決にも尽力したことで知られる。親鸞の晩年まで手紙を通じて法義を仰いでいた特に信頼のあった門徒と言えよう。重ねて、落田門徒や猿島門徒もこの横曾根門徒の流れを汲む門徒集団であった。

続いては高田門徒である。下野(現在の栃木県二宮町高田)に建立された高田山専修寺を中心とした門徒集団である。高田門徒は関東の門弟の中でもかなり有力な位置を担っていたと言って良いだろう。親鸞が京都に戻る際に弟子・真仏に託し、後に顕智が代を継承し専修寺は関東門徒の中でも勢力を伸ばすことになる。尚、高田専修寺は後の火災により、これらの国宝、並びに寺基を三重県の津市一身田に移すことになる。以来専修寺と呼ばれるようになったと伝えられている。専修寺の強みは国宝『三帖和讃』、重要文化財『教行信証』、『親鸞伝絵』などの寺宝を有している点にある。当時の門徒集団として成長したことはこの点からも伺える。次に考察するのは鹿島門徒である。中心人物は、鹿島神宮において元は官司であった順信である。この鹿島門徒は後の三代覚如による大谷本廟の問題が生じた時に、絶大な発言権を有していた。そこには順信が大谷本廟の護持を担う覚信尼・覚

恵に対して多大な支援をしていたことが大きな理由であるとも考えられる。

このように、親鸞の東国での布教活動は後の門徒集団の核を形成させることに成功する。しかしそれはあくまで伝道の結果として優秀な弟子・門弟を集め後の二十四輩を作りあげた。親鸞は意図的ではなく一心に阿弥陀如来の教えを説きながらも、本来ならば決して救われない自分自身を救いの目当てとした阿弥陀如来の大悲のほたらきを説くその姿を見て人々は親鸞を慕い、集ってきたと考えられる。野心の無い親鸞は弟子も寺も作ろうとは考えなかったが、日に日に増える念仏の仲間との出遇いには喜びを隠せなかったことであろう。関東に赴き十年ほど経過した元仁元年（一二二四）、親鸞五十二歳の時に『教行信証』は完成する。関東在住という自信教人信による実践的伝道も丁度、折り返しの時期でもあった。

第二節 蓮如の吉崎布教

蓮如は真宗を再興させた中興の祖である。その多くの功績の中でも蓮如が最も布教伝道に勤しんだ時期を考えるならば、それは吉崎布教である。波乱の吉崎時代において、蓮如の伝道にはどのような工夫が施されていたのだろうか。応永二十二年（一四一五）に第七代、存如の長男として生まれるもその生活は貧困なものであった。当時の本願寺はその本堂の大きさも三間四方しかあらず、参詣に足を運ぶ人はほとんど居なかったのである。蓮如と親鸞の相違点を挙げるならば、親鸞自身は己が救われていく道を問い続け、求め続けた求道者であったが、蓮如は教えを説き広める伝道者であったと言えるだろう。勿論、蓮如自身も求道・研鑽を重ねてきたが、蓮如は浄

土真宗という教団に生まれたという点で親鸞とはまた違った境遇に置かれた。本願寺の護持を任されるという使命感もまた蓮如の求道と勉学を没頭させ、宗祖の『教行信証』、存覚の『六要鈔』、『安心決定鈔』などを精読、熟読し勉学に励むものになったと言える。四十三歳の時に本願寺第八代を継ぎ、本願寺再興を決心して布教活動を展開していく。蓮如の分かり易い言葉を用いる説法に民衆は集まり、門信徒の数は日に日に増えていったのである。だが本願寺の急成長と蓮如の過激な行動は、勢力拡大を恐れた旧仏教勢力から反発を招くことになり寛正六年（一四六五）、比叡山により大谷本願寺は破却される（寛正の法難）。破却後、蓮如は近江国（滋賀県）にて布教をするが比叡山に近い近江での布教に限界を感じて文明三年、越前国（現在の福井県）の吉崎に「吉崎御坊」を建立する。吉崎での布教については次の章にて詳しく考察する。それまでの本願寺は天台宗の末寺であったのだが、一度この時期には真宗寺院として独立を果たしている。

吉崎を退出後は、大坂・石山への布教に進み、京都山科へ本願寺を建立する。晩年は大坂にて余生を送るも八十四歳の頃から段々と身体を悪くし、四月頃から病にかかりながらも蓮如はお法のことを忘れることなく過ごしたという。どうか皆さんがまことの信心を決定されるようにと願いながら明応八年（一四九九）、三月二十五日、往生する。その長い生涯においての蓮如の功績を挙げると以下の四つである。

①『正信偈和讃』の刊行、②『正信偈和讃』の朝暮勤行依用、③『御文章』による伝道、④山科本願寺の建立
これ程の功績を残した蓮如はまさに「中興の祖」と呼ばれるにふさわしく「本願寺の再興」を成し遂げ八十五歳の生涯を終え山科の地にて荼毘に付されたのである。

蓮如の波乱万丈の人生において、吉崎においての布教活動は意義の深いものであった。その中でも比叡山からの襲撃は大打撃であり、本願寺は一つの場所に留まらずに移転をしながら伝道活動を進めていくことになる。蓮如が確立した『御文章』の著述はこの吉崎にて活発に行われたのである。

文明三年（一四七一）：七通、文明四年（一四七二）：六通、文明五年（一四七三）：三十通、文明六年（一四七四）：二十七通、文明七年（一四七五）：八通「吉崎退出まで」¹⁷

御文章の作製数からも、この文明五年が蓮如による伝道の最盛期であると言えよう。蓮如はこの吉崎において「女人往生」についても御文章に読んでいる。蓮如は生涯五人の女性と結婚している。四人の妻を続けて亡くし、さらには吉崎時代に娘を亡くしたのである。そんな蓮如が女人の往生について記したことは何か意義深いものを感じると言える。蓮如は五帖第六通において「五濁悪世の衆生といふは一切われら女人・悪人のことなり」と書いている。18当時、非常に弱い立場に置かれていた女性に対して阿弥陀如来の下では男・女も分け隔てなく平等に浄土に生まれると説いた。当時の仏教での女人が往生することはないという常識を打ち破り、揺るがない論理で力説した蓮如に多くの女性は心から救われたことであろう。

蓮如の布教の特色としては宗祖親鸞への回帰であったと考えられる。誰であっても、全てのひとに「同朋」として接していくことを念頭に置き、弥陀の本願を信じ、集まった人は誰でも受け入れる姿勢をとり、一心に本願を信じることを進めていった。それまでは門徒と法話者は上下関係のようなものが敷かれていたが、蓮如は平座・車座にて民衆に法話をした。蓮如もまた門徒たちと同じ目線で言葉を交わし、「御同朋・御同行」のスタイルは伝

道を行うに当たつての基本姿勢であつたと言える。

布教活動の際に新たに道場として設けたものが「講」であつた。講とは元々、一定の日に集まつて経論を講読したりする法会のことである。「四講」や「六日講」などは蓮如時代に形成された。19主に村の有力者により建設された施設であり、寄合談合の場として使われた。人数が多くなると「寺」にすることも出来たという。蓮如は吉崎にて「多屋」と呼ばれる宿泊施設を設立し、各地から集まる門徒を受け入れこの吉崎は一大宗教都市として賑わいを見せたのである。蓮如の布教活動がなぜこんなにも成功し、広まりを見せたのであろうか。勿論、蓮如の門徒に対する真つ直ぐな姿勢や、文書による伝道方法が多く、民衆に定着したことが挙げられるが、それ以上に蓮如が各村・集落のリーダー格である有力者の心をつかりと掴んでいたことが成功の鍵になつたと考えられる。門徒一人一人を大事にしながらも、特に有力者の確保は「講」を建設するためにも必要なことであると同時に、有力者・村の長が寺の行事の際は村民を引き連れて参詣を仕切る役回りであつたとも考えられる。各家が「個人」ではなく、村単位で一つの「家」であるようなスタイルは一度に多くの門徒を布教するためには有効なものであつた。もう一つ蓮如が確立したものが有名な『御文章』であつた。『御文章』は古来『御文』、『消息』、『勸章』、『宝章』と言われ、大谷派では『御文』、本願寺派では『御文章』と言われる。御文章の製作数を見ると河内出口時代が七通、山科時代が五通、大坂御坊の時代が六通、そしてこの吉崎時代は四十通にもなり、細かいものを合わせると、その数は二百数十通にもなる。蓮如自ら民衆向けに書き記した御文章は門徒に宛てた手紙である以上に和文の法話であつた。蓮如の時代、民衆の全てが文字の「読み・書き」が出来た訳ではない。字を読めな

い者でもくり返し文言を聞き、耳に残っていく御文章は効果的な視聴覚伝道と言える。その他にも蓮如直々に掛け軸に「南無阿弥陀仏」の六字名号を書き、門徒に授与するという新しい布教方法を始めていく。十字名号の「無碍光本尊」は比叡山より本願寺破却の口実にされたため六字名号の授与に切り替えた。このような切り替え・対応の早さも蓮如の伝道においての優れた点だと言える。²⁰「他流には、名号よりは絵像、絵像よりは木像といふなり。当流には、木像より絵像、絵像より名号といふなり」²¹という考えの下、その文書布教は本格的なものになっていく。本願寺はそれまで、「六時礼讃」を勤行していたが、親鸞の書き記した「正信念仏偈」と「和讃」を合わせて開版したことにより、門徒に「経本」という形で授与し、門徒とともに勤行が勤まる環境も整ったのである。蓮如は単に本願寺という教団を拡大したのではなく、「宗祖の眞実信心を明らかにすること」という決意を要において教化を進めていった。そして最も重要視したことは、門徒と共に生きていくことである。如来の世界の下では皆兄弟であるということを念頭においていた蓮如は門弟の法敬坊にも、弥陀の世界に先に生まれたものは兄で、後に生まれたものは弟になる。だから私と法敬坊は兄弟であると伝えた。「御同朋、御同行」²²としてあらゆる人々を尊敬しながら宗祖の教えを伝えながら、「弥陀の本願に遇い、ともに救われる者」として門徒、門弟たちの心に強く根付いていったのである。蓮如の生きた時代は波乱の時代であった。さて、この章では開教の礎というテーマで論じたが、親鸞・蓮如の両者が築いた礎とは何を指すのだろうか。親鸞は東国において長年布教をした際に二十四輩達が開いた寺院を、蓮如は吉崎、大坂・石山、山科においてそれらを宗教都市として築き上げた。この両者が本当の意味で築き上げたその礎とは寺院の土台・基盤という意味ではなく、開教をした者

ということを指すのだと考えられる。現代の開教を行う際、様々な工夫が必要不可欠となっていく。

現代における開教のヒントは親鸞・蓮如、自らの伝道経験の中に色褪せず残っているのであるから、親鸞・蓮如の経験を教科書にして、それらを紐解くと、現代にも通ずる伝道方法が見えてくるであろう。それは次章において詳しく考察したい。

第三章 現代の都市寺院の伝道

第一節 都市開教・伝道の意義

序論でも触れたが、都市開教という活動が表向きに展開し始めたのはここ数年のことである。都市開教という言葉と活動自体は大正末期〜昭和十年頃から展開されたものである。都市開教とは人口が集中している都市で、浄土真宗の教えがまだ広まっていない地域に寺院を設立し教えを広める取り組みのことである。東京教区は八都府（東京都・神奈川県・静岡県・山梨県・千葉県・茨城県・埼玉県・群馬県・栃木県）で形成され、中でも首都圏の一都三県（東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県）を「首都圏宗務特別開教区」に定めて都市部の開教にあたるため、今まで宗門とご縁の薄かった、また無かった方々への伝道活動を様々な形で展開している。では、なぜ今日、都市部において教えを開いていく必要があるのか考察していきたい。首都圏開教の重要性について築地本願寺は次のように述べている。

禁 廠

日本の総人口の約一億二七〇八万人(※)に対して約三十七%の約四七三・四万人が居住しており、本派寺院四五七カ寺(本派全寺院の約四%)、都市開教布教所十二カ所を併せると四六九カ寺となる。また他宗他派については、約一八〇〇〇カ寺が宗教法人名簿に登録されているが、内本派寺院は約三%しか所在していない。「新たな門徒の誕生」は全宗門的な課題であるが、以下の理由で東京首都圏を中心にして展開することが特に重要であると考えられる。①日本の人口の三分の一以上が東京首都圏に集中していること。日本の総人口は減少期に入るが、首都圏だけは今後もしばらく人口増加を続ける可能性が高いこと。②人口増の要因となった地方からの移住者には、多くの離郷門信徒が含まれているにも関わらず、宗派の寺院は既成仏教教団の三%弱しかなく、寺院数の上からも門信徒のニーズを満たすにはほど遠い状態であること。③政治、経済、文化の中心であり、情報のほとんどが東京首都圏から発信され、生活様式や考え方も東京首都圏を中心に地方へ伝播している。あらたな取り組みも東京首都圏をモデルとして、全国に展開することが有効であること。

※：総務省統計局 二〇一四(平成二十六)年十月一日現在

首都圏開教推進部である築地本願寺は、「これからの人々にどのようなようにお念仏を広めていくか」という課題を伝道、開教の両面から検討しながらこの取り組みをしている。以上のことから、人口の三分の一が東京首都圏に集中しているため、都市部での開教を本格的に進めることは重要である。

人口が集まり続ける土地において今現在、浄土真宗の寺院を必要としている世代が多いうちに迅速な対応で開教を推進し行かなければならないであろう。逆に言えば、浄土真宗の寺院を必要としない世代が訪れつつあるこ

とも開教を推進する理由の一つでもある。人口が集中するということは、つまり政治、経済、文化が集中することであると築地本願寺は述べている訳であるが、親鸞・蓮如の時代の伝道方法においても両者は当時の文化や流行というものを自身の伝道の一環として織り交ぜていたことも明らかである。伝道、開教の両面から検討する時、都心部に集まる桁違いな情報を取り入れ、またそれに習いながら文化・流行を組み込んだ伝道を思案することもこれから求められるクリエイティブな伝道方法になると言える。しかし、やはり受け継がれた伝統や揺るがない論理を無視し、好き勝手な伝道を行うこと出来ない。新たな伝道を思案する時、同時にぶれてはいけない浄土真宗の論理がそこにはあるということも忘れずに留めておきたい点である。

平成元年、私の自坊は埼玉県新座市に都市開教の取り組みの下、広島県の本院より「東京出張所」という形で建立された。この新座市は埼玉でも東京に隣接しており、交通面のアクセスが良いことに加えてベッドタウンとして人が集まりやすいということは開教においても利点が多い。本来は都心部に開教する事が目的とされているが、地価が高騰し続ける東京には住みづらいという理由から安価な土地に家を建てる人が少なくない現状からも、神奈川県・千葉県・埼玉県は開教に適した場所であると言ってよい。都心部に職場・住居を持つ人と、職場としてのみ都心部に通い、住居を前述の三県にて持つ人と、これら両面から開教を検討する必要もある。都市部において開教される寺院には、①都市開教対策本部において設立されるもの(〇〇布教所)、②地方に本院があり、分院として新たに設立されるもの、③同じ教区内に本院があり、分院として設立されるものの三つがある。

今日、この都市開教という取り組みが、なぜ必要なものになってくるのか。現代の都市部において浄土真宗の

教えを広めるということであるが要となる伝道の対象は特に若い世代である。現代の社会の風潮として特定の宗教のみを信仰するというのを毛嫌いし、前述したそれまでの家の宗教から個人の宗教へ転換しつつあることも否めない。そうした社会状況を批判する気は到底ないのだが、若い世代が宗教離れしている現状は見過ごすことは出来ない。しかし、これからは新たに都市部を目指して移り住み、都市部を实家として展開していく世帯が増加すると予想される。つまり今、都市部においての開教を成功させることは宗教離れした現代の風潮を打開する方法の一環でもあると言ってよいだろう。教えが伝承、受け継がれていない現状を考えた時に、門信徒に責任転嫁させることなど無礼千万であり、伝道の仕方を工夫しない僧侶の怠慢が招いた結果ではないだろうか。都市開教は我々僧侶への挽回の好機である。では、そんな現代の社会において浄土真宗本願寺派の都市開教がどの様にして取り組まれているのか。次節にて詳しく考察していく。

第二節 開教の現状

築地本願寺は首都圏開教事業の展開として以下のものを挙げている。

- ①開教拠点(布教所)の設置、②首都圏宗務特別開教区開教協議会、③教区外寺院の活動拠点への対応、④首都圏開教を担う人材の育成、⑤離郷門信徒への対応、⑥法務委託・代行制度、⑦新規門信徒への働きかけ、⑧資金金庫の充実と活用、⑨新たな伝道方策の構築²⁴

築地本願寺は都市開教を担う人材の確保に頭を悩ませている。開教活動にあたり「首都圏都市開教専従員(特

「区専従員」の研修カリキュラムに基づき準備を進めている。二〇一四年四月一日で一名、同年九月一日で二名、二〇一五年四月一日で一名、計五名の専従員候補を研修している。しかし、継続的に開教に従事が可能な人材の確保を課題としており、従来までの研修期間・研修内容を見直し、待遇の改善などに努め布教所開設時の土地建物を専従員に無償貸与する方針も検討している。²⁵

また都市開教を行うにあたり、上記以外にも宗教法人格を取得することが大変困難な問題でもある。新たに寺院を建立する場合には、宗教団体として適切な活動がなされているか、加えて十分な実績を積んでいるかなど厳正に審査される。今日、とある宗教団体が起こした事件などを警戒するべく宗教法人格の申請・取得は一層困難となっている。また、首都圏開教推進部である築地本願寺は開教の資金として毎年決まった金額の支援をするのだが、この支援期間はわずか数年のものであるため全面的に築地本願寺の支援を頼ることは叶わない。つまり開教の環境作りが迅速に行っても、時間を必要とする問題やその他の資金繰りといった問題も孕んでいることが都市開教の現状と問題である。開教資金の工面に頭を悩まし、副業を行いながら開教を行っている寺院も少なくない現状であるが、副業に力を注ぎ過ぎてしまい単なる資金稼ぎの一環となってしまうのは本来の開教という目的から離れてしまう。教えのない土地に浄土真宗の教えを広げ、ともに念仏する道場を建立したい、と高い志を掲げたからには志半ばで諦めず粘り強く精進し検討するべきである。

東京教区埼玉組には全三五ヶ寺の真宗寺院が登録されているが『埼玉組寺院史』²⁶によると分院という形で現在の住職、または代務が開基として建立した寺院件数は一八ヶ寺。その中でも都市開教を志して新たに建立した

寺院は一四カ寺である。27つまり組内の三分の一以上の寺院が都市開教への取り組みに意欲的な姿勢を見せていると言つてよい。門主が主体となつて都市開教の重要性を掲げ、築地本願寺を中心として活動を推進している今日、都市開教とはもう志願者のみの小規模な取り組みではなく、組内の連携、さらに教区内においても密接な協力が求められる宗派を挙げての一大プロジェクトの一環なのである。それまで越えられなかった他教区という垣根を越えて、本願寺派という宗派の下、手を取り合う日が来たのだと言つて良いのではないだろうか。

第三節 新たな伝道方法

さて、第一章、第二章と親鸞・蓮如の伝道について考察を重ねてきたが、この両者に共通して言えることは、自らが未開の土地に赴き布教、伝道を行い開教の礎を創りあげたことである。両者の布教活動の功績は現代の都市開教の原点であつたとも考えられる。親鸞の時代に蒔いた念仏の種は時間をかけて蓮如の代に一斉に開花し、念仏の教えは広まりを見せたと言える。その伝道の方法は様々で両者は指導者というカリスマ性を備えながらも時に民衆に歩幅を合わせ、また「文書伝道」という現代にも用いられている方法にて伝道を進めてきた。しかしながら、親鸞・蓮如両者が成功を見せた「伝道」は彼等の生きた「時代」に対応した伝道方法である。両者と全く同じ方法を用いたとして、はたして現代の社会で同等の成果が得られるのだろうか。なぜ、親鸞・蓮如は開教に成功したのだろうか。親鸞・蓮如が行った布教伝道は、その時代において今までにないまさに「新しい伝道」であつた。これからの現代の伝道を担う者は親鸞・蓮如の成功例をそのまま同じように実践するのではなく、両

者の精神を基にして新たな取り組みを思案していくべきであろう。では浄土真宗の伝道において種類をいくつか考察したい。

浄土真宗において代表的な伝道方法は法話を中心とした法座による伝道であるが、他にも文書による伝道、視聴覚を用いた伝道、組織による伝道など種類は様々である。文書伝道は今日の伝道においても用い易い手法の一つであろう。手紙や施本、ハガキや寺報などは伝道のツールとして普及している。前述したように、この文書を用いた伝道は親鸞・蓮如も同じく用いた手法である。親鸞は関東の門弟と手紙のやり取りを重ねて質問やそれらの法義を確かめるために、蓮如は御文章を用いることで門弟たちに効果的な伝道を成功させた。蓮如の自筆の名号本尊を門徒に書き与えたことも紛れもない文書伝道の一つである。その他にも現代、演劇・影絵劇などの上演、ラジオ・テレビ法話などを用いた視聴覚伝道と呼ばれる手法は、本願寺三代・覚如が確立した『御伝鈔』、『御絵伝』による絵解きと通ずる部分がある。現代、布教伝道において新たなツールとしてインターネットによる伝道が挙げられる。ここ数年で爆発的に急成長をしたインターネットは文書伝道という面、全国どこにいても端末からアクセスが可能ということからも利点が多い。何か疑問が生じた際、気軽にインターネットを使って用語や語句の意味などを検索することも日常的に行われている。インターネットによる情報はデータとして保存・伝達される。故に書籍や印刷物と違い、かさばり置き場所に困ることも、欲しい情報を探すための時間も大幅に短縮出来る。親鸞・蓮如の時代に通常、手紙のやり取りを依頼すれば往復でも優に一ヶ月はかかってしまい、また道中に問題があれば無事に届く保証はない。インターネットを利用すれば数秒で相手に情報を送信することが叶うと

いうまさに夢のような文書伝道である。しかし問題点も多々あり、若者には利用しやすいインターネットだが、年配の門徒には使いこなしていくという点が挙げられる。また、紙の媒体ではないという点でそれまで確立してきた「価値」のようなものが低下しまったのではないかと考えられる。加えてインターネットは書籍と違いデータにより管理されているため、管理者の一存で自由に内容を書き換えることも容易く、信憑性の問題から全面的に信頼のおけるツールとは言い難いのである。年末に送る年賀ハガキを手書きで送る人は今、どの位居るのだろうか。パソコン・プリンターの性能も進化し続けている近年、手書きによるものは激減した。年賀ハガキによる伝道も立派な文書伝道に含まれるが、機械的に、ただ作業的に送る文書に本当の意味で伝道の意義が込められているのだろうか。その利便性だけを優先し続けることもまた、危険と隣合わせであるということを留意していきたい。親鸞・蓮如の伝道はそれぞれにその時代に適応した伝道方法を思案し実践した事は前述した通りだが、そこにはどんな工夫がなされていたのだろう。親鸞が著作の『三帖和讃』は鎌倉期に流行りを見せていた今様体の和讃であった。今様は鎌倉院政期文化の歌謡で、後白河法皇の『梁塵秘抄』に編集されている。七五調で構成された『三帖和讃』は民衆にも親しみをみせたと考えられる。浄土真宗を全く知らない人に伝道することが求められている現代ではどのような方法を用いて伝道を行うことが正解と言えるのか。宗教は年寄が考えるものだと考えがちな若い世代に伝道を重ねていくことは簡単であるとは言いがたい。では、現代の本願寺、並びに真宗僧侶など伝道に関わる者達も時代に合った伝道を思案することが必要である。例えるなら親鸞の『三帖和讃』は一種の「音楽伝道」である。現在、築地本願寺を初め、様々な寺院にて行われている「お寺ライブ」は賑わいを見せ

ているが、これは敷居が高いという寺のイメージ・潜入観を緩和する良い伝道方法だと言える。門信徒は寺を訪れるものであると寺や僧侶の勝手な常識や怠慢で今日まで過ごしてしまったことが門徒離れにつながり、また寺は敷居の高いという寂しいイメージを生んでしまったとも考えられる。そんな中、この親鸞聖人七五〇回大遠忌法要の際に作られた「宗祖讃仰作法」という音楽法要はまさに音楽による伝道の極みである。「音楽法要」のみでなく浄土真宗の勤行において最も重視されるべき点は門徒と共に一緒に読経する点にある。前述したように以前までの真宗は勤行において「六時礼賛」を用いていた。門徒と共に勤められる読経を目指した蓮如が後に「正信偈和讃」を刊行し、僧侶・門徒が隔たりなく勤まる勤行の形態を確立したのである。この度、親鸞聖人七五〇回大遠忌法要にこの音楽伝道である「宗祖讃仰作法」が勤まったことは意義深いものであると考える。「宗祖讃仰作法」には親鸞・蓮如それぞれの伝道のスタイルが反映された音楽伝道の集大成ではないかと考えられるのである。

結論

現代人が求める宗教とは何かと考えた時、単に「心の拠り所」と枕詞のように答えて良いものだろうか。現代人が求める宗教とは、私利私欲な願いを叶えてくれるものである。これは現代にのみ言えることではなく、どの時代でも広く願われていることではある。病気を治してくれて、巨万の富を与えてくれる宗教に心が移ってしま

うのもこの時代の生んでしまった産物である。この娑婆世界での命が尽きてから浄土に往生出来ると説いても容易に信じることは出来ない。浄土真宗は現世利益が無いのだと誤解をし続けている人には尚更、難解なものに成り得る。もはや宗教は役に立たなければ意味がないものだという理論が蔓延している。ではなぜ今、浄土真宗の教えを伝道する必要があるのだろうか。今日まで絶えず受け継がれたこの教えは後世にも受け継がれてゆくことであろう。不完全な偽りの宗派であったならば、今日まで続くことは叶っていないだろう。その教義の中で説かれる南無阿弥陀仏を称えても、残念だが我々凡夫が願うような病気が治ることも富が降ることもあり得ない。阿弥陀仏がそんな強欲で汚れた願いを叶える仏であるならば本当の意味でそこに光が照らされ、手が合わさることはないだろう。

前述したように現在、築地本願寺は都市開教寺院、並びに布教所の設立の取り組みに尽力している。その際に首都圏都市開教専従員の確保に頭を悩ませている。継続して従事することが可能な専従員の確保が困難であるという点が大きな課題の一つである。都市開教寺院・布教所の数を増やしていくように活動がなされている現在、比例して専従員の数も増やしていく必要がある。真宗学の研究分野は大きく浄土教理史、真宗教義学、真宗教学史、真宗伝道学の四つに分類される。浄土真宗の教義は、親鸞によって組織化・体系的に明らかにされた阿弥陀仏の救済構造を指す。その際に、専従員となる僧侶には熟成されたこの教義、教学を十分に吸収し噛み砕き、伝道に臨んでもらう必要があると考える。

「教義学」には、真宗教義の歴史的展開を研究する「教理史」と教義が顕された聖典を緻密に研究する「聖

「典学」が欠かせないと示している。また歴史的展開のなか、親鸞聖人の開顕された浄土真宗を伝承した者の
教学的な研究も欠かせないと示し、その研究は、それぞれの時代背景や、教学的課題などを抱えながら、浄
土真宗を明らかにしようとする営みであり、教団が形成されてからの営みなので、教団論などにも深く関わ
っている。 27

前章において都市開教の礎ということを論じたが、寺院という外観を検討する前に開教の担い手には教義にお
いてぶれることのない軸を持ち合わせて伝道を重ねていくことが要求される。門信徒の中には浄土真宗の教義に
興味を持ち、訪ねて来ることもある。門信徒の質疑に対して納得のいく応答をすることが要求されるが、果たし
て現実問題はいかがだろうか。布袍を着て袈裟を付けているということにはどのような意味が込められているの
か。僧班・寺班という僧侶・寺の位を確立している本願寺は蓮如の確立した平座の法話というスタイルを壊して
いるようにも見受けられる。本来、僧侶にも門信徒にも優劣は存在せず、僧侶の位などは真宗僧侶のあるべき姿
から離れてしまっているようでもある。

現代の伝道が任された真宗僧侶は伝道をする上で、熟成された真宗教義・教学を基に、論理・セオリーを確立
させながら臨まなければならない。都市部に寺院を建立し「現代の人に分かり易い伝道」を考える中で、近年増
えつつある空き寺や離教門徒などの問題も都市開教に携わる僧侶が気に掛けるべき課題である。自信教人信とい
う真宗の根幹をよくよく心に留めながら、先駆者達の法統を絶やすことなく開教の担い手として努めていきたい。

- 1 専如門主「法統継承に際しての消息」
 - 2 『浄土真宗辞典』五六七頁
 - 3 『宗門基本法規集』三頁
 - 4 『浄土真宗辞典』二七六頁
 - 5 岡亮二『教行信証』口述五〇講 親鸞のころをたずねて第二卷(下)』八六頁
 - 6 親鸞が赦免後、越後から関東に移住した理由を千葉乗隆氏は、その移住の理由について、たとえば聖人の妻惠信尼の実家三善氏の一族が常陸に住んでいたのではないか、また三善氏の所領が常陸にあったのではないかと。あるいは越後の農民が常陸に移住したのでそれにしたがって行ったと。また別の観点から、聖人の尊敬する聖徳太子の信仰が東国では特に盛んであったので、そのためではなく、いろいろ説がある。
- と述べており、中でも最近では善光寺の勸進聖の説が強く、親鸞は念仏をすすめる聖の一人であったとも考えられるとも述べている。(千葉乗隆『親鸞聖人もがたり』本願寺出版社、二〇〇〇年)
- 7 『浄土真宗聖典(註釈版)第二版』(以下、註釈版と称す)八三二頁
 - 8 武田鏡村『関東の親鸞』二十二頁
 - 9 『浄土真宗辞典』五一七頁

- 10 『註釈版』二六一頁
- 11 増谷文雄『増谷文雄名著選目 親鸞の生涯 歎異抄 親鸞の思想』四五―一頁
- 12 千葉乗隆『親鸞聖人ものがたり』一三〇～一三二頁
- 13 『註釈版』八一〇頁
- 14 『註釈版』一〇五五頁
- 15 『註釈版』八三四頁
- 16 『註釈版』七八三頁
- 17 内藤知康『御文章を聞く』四頁
- 18 今田法雄『蓮如上人(再興と伝道の生涯)』一五五頁
- 19 『浄土真宗聖典註釈版』一一九三頁
- 20 内藤知康『御文章を聞く』七頁
- 21 千葉乗隆『蓮如上人ものがたり』一六〇頁
- 22 『註釈版』一二五三頁
- 23 『註釈版』八〇三頁
- 24 築地本願寺首都圏開教推進部より提供して頂いた史料より
- 築地本願寺首都圏開教推進部より提供して頂いた史料より
- 築地本願寺首都圏開教推進部より提供して頂いた史料より

禁 廠

- 25 築地本願寺首都圏開教推進部より提供して頂いた史料より
- 26 『埼玉組寺院史 これまでの歩み』九八〜九九頁
首都圏都市開教専従員として布教所を任された寺院を含まれる。
- 27 葛野洋明「実践真宗学における研究方法の研究」二一六頁

参考文献・書籍

- 天岸淨圓『御文章 ひらがな版を読む』本願寺出版社、二〇一二年
- 池田勇諦『信心の再興―蓮如『御文』の本義―』樹心社、二〇〇二年
- 今井雅晴『親鸞と東国門徒』吉川弘文館、一九九九年
- 今田法雄『蓮如上人(再興と伝道の生涯)』永田文昌堂、一九九六年
- 上場顕雄『近世真宗教団と都市寺院』法蔵館、一九九九年
- 神田千里『蓮如 乱世の民衆とともに歩んだ宗教者』山川出版社、二〇一二年
- 『埼玉組寺院史 これまでの歩み』埼玉組、二〇一三年
- 武田鏡村『関東の親鸞』三一書房、一九九〇年
- 千葉乗隆『親鸞聖人ものがたり』本願寺出版社、二〇〇〇年
- 辻川達雄『蓮如 吉崎布教』誠文堂新光社、一九八四年
- 内藤知康『御文章を聞く』本願寺出版社、一九九八年

延塚知道・藤獄明信・安藤文雄・三明智彰・加来雄之・一楽真『蓮如上人 親鸞聖人の教えに生きた人』

東本願寺出版、一九九六年

増谷文雄『増谷文雄名著選Ⅱ 親鸞の生涯 歎異抄 親鸞の思想』佼成出版社、二〇〇六年

山崎龍明『詳解 親鸞聖人と浄土真宗』二〇一〇年

脇谷暁暢『蓮如上人 御文章に聞く』妙覚寺出版、二〇一一年

『浄土真宗のこれから』築地本願寺、二〇一三年

首都圏における伝道・都市開教の現状について 築地本願寺

東京首都圏都市開教対策本部・・・<http://www.kaikyuu.net/>

聖典・辞書

『浄土真宗聖典(註釈版)第二版』本願寺出版社、二〇〇九年

『浄土真宗辞典』本願寺出版社、二〇一三年

参考論文

伊東真輝 「現代における真宗伝道」『龍谷大学大学院実践真宗研究科紀要』第三号、二〇一五年

葛野洋明 「実践真宗学における研究方法の研究」『真宗学』第一二九・一三九合併号、二〇一四年

貴島信行 「真宗伝道における自信教人信の意義」『真宗学』第一二九・一三九合併号、二〇一四年

都呂須孝文 「親鸞聖人の伝道と蓮如上人の伝道」『中央仏教学院紀要』第一七号、二〇〇六年

長尾光雲 「寺院活動の可能性」 『龍谷大学大学院実践真宗研究科紀要』 第二号、二〇一四年

平野将庸 「現代における伝道―インターネット伝道の可能性と課題―」 『龍谷大学大学院実践真宗研究科紀要』

創刊号、二〇一三年

宮崎圓遵 「親鸞聖人と関東の門弟―聖人の在関時代を中心として―」 『龍谷教学』

第一七号、一九八二年

禁本 廠

コピ―